

主体的な学びの授業実践例—朝鮮語教育の取り組み—

佐々木 正徳
姜 太銀
李 善姫
齋藤 盛午
高 槿旭

要 旨

本稿は2024年度に全学共通科目として開講された朝鮮語科目の授業内容を紹介することで、2027年度に完成年度を迎える新カリキュラムの質の向上に努めようとするものである。必修科目と自由科目からそれぞれ2科目ずつ、各担当教員の授業実践の工夫について担当者自身が執筆している。授業実践報告からわかることは、いずれの授業も主体的学びを促す取り組みがなされていることである。主体的学びは学習者のモチベーションの向上や、成果に対する適切な自己評価をもたらし、最終的には学生の肯定的な自己省察にもつながっているようである。新カリキュラムにおいてはどのレベル、どの内容の授業であってもこの点をふまえ、より効果的かつ体系的に主体的学びを促す授業が提供できるように研究室全体で実践を積み重ね、考察を深めていくことが重要である。

キーワード：主体的学び、ピア活動（協働学習）、授業設計

序論：本論の目的

全学共通科目の言語科目で展開される言語B科目では2024年度から新カリキュラムが始動し（完成年度は2027年度）、初年度にあたる今年度は必修科目の履修の仕組み・内容が大きく改編された。週2回開講という点こそ変更はないが、これまで同一科目（〇〇語基礎1・2）を週2回14週受講し半期2単位（年間4単位）という要件だったものを、アウトプット中心の授業（朝鮮語1・2）とインプット中心の授業（朝鮮語A・B）の二つに分け、それぞれを週1回14週で1単位の設定とした。科目ごとに修得する技能を明確にしたわけである。

また、自由科目については完成年度まで前カリキュラムと新カリキュラムの授業が併存することになる。しかし、入学年度による学生の履修制限は基本的に定められて

いないため、今年度は前カリキュラムで必修科目を履修し単位を修得した学生（2～4年生）が新カリキュラムの自由科目を履修している。また、次年度以降は新カリキュラムで必修科目の単位を修得した学生たちが閉講前の前カリキュラムの授業を履修するケースも考えられる。よって、前カリキュラムの自由科目であっても新カリキュラムのねらいをある程度ふまえ、新たに開講される自由科目への移行がスムーズに進むような工夫が担当教員には求められている。

本稿は4名の朝鮮語教員による2024年度担当科目の授業実践報告を通して、今後の新カリキュラム運営の参考にしようとするものである。朝鮮語教育研究室では担当者連絡会などの機会を通して授業実践の共有に努めてはいるが、これまで誰もが読めるような形で記録を残してきたわけではなかった。今回、各執筆者の担当授業を記録することで、言語問わず参考にできる内容も発見されることを期待している。扱う授業は次の通りである。まず、新カリキュラムの目玉と言える必修アウトプット科目「朝鮮語1・2」は教育講師の李善姫先生が、インプット科目「朝鮮語A・B」は兼任講師の高権旭先生が執筆する。自由科目はともに上級科目の授業実践を報告する。上級の中で比較的受講しやすい科目として設定されている「上級朝鮮語リスニング・リーディング1・2」を執筆するのが兼任講師の齋藤盛午先生、最も高いレベルの科目として設定されている「上級朝鮮語演習1・2」を執筆するのが教育講師の姜太銀先生である。なお、執筆時点（2024年11月）では秋学期の授業が進行中のため、各授業報告の内容は春学期開講授業が主たる対象となっている。佐々木は各実践報告を通読し表現の統一などを行ったほか、序論と結論を執筆した。

1. 必修科目の成果1：「朝鮮語1・2」の授業実践

本報告は、李が担当した2024年度「朝鮮語1・2（アウトプット科目）」の授業実践報告である。最初にシラバスに記載されている授業の目標と授業内容・テキストを紹介し、その後に授業の概要と成果、今後の課題について報告する。

1.1. 授業の目標・授業の内容・テキスト

シラバスは全クラス共通であり、次のように記されている。

- ・ 授業の目標：1クラス20名程度の学習環境で、一人一人の朝鮮語での表現力（CEFR A2レベル程度）を養うことを目的とする。
- ・ 授業の内容：「初歩的な語彙や語句を習得して、日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、自己紹介をするなど、個人的なトピックを表現できるようになることを目指す」ことになっている。
- ・ テキスト：石坂浩一・佐々木正徳・金良淑・郭珍京・李和貞・岡村佳奈
『プリティ・コリアン』2023年、朝日出版社
<https://text.asahipress.com/korean/detail.php?id=1902>

1.2. 授業の概要

朝鮮語は文字と発音から学ぶことが必要な言語なので、「文字と発音」を学ぶ期間(初回～第4週目)はインプット中心の授業の「朝鮮語A」と連携して授業を実施したが、「朝鮮語1」では初回の授業から「挨拶」「教室で使う用語」「日常の簡単な表現」から少しずつ簡単な朝鮮語を積極的に使うように意図して授業を行った。

第5週目の授業からは「朝鮮語1」は完全に独立した授業としてアウトプット授業が実施され、主に会話練習を中心とした授業運営をした。

授業の流れは、まずテキストの各課にある会話文を確認しつつ「朝鮮語A」で学ぶ文法事項に簡単に触れた後、会話文をペアで練習した。ペアの練習はただ読むだけでなく、日本語を見ながら朝鮮語で話す練習を主に行った。

ある程度教科書の会話文を自然に話せるようになると、教科書に載っている内容に学生の関心のある分野(歌、ドラマ、食べ物など)の内容が含まれた日本語と朝鮮語の文を事前にネット上にあるプロンプターを使って準備し、スピードを変えながら話す練習をした。

その後、ペアで教科書の会話文の内容を変えてさらに内容を加え、自分たちが作ったストーリーで話す時間を設けた。このように「朝鮮語1」では、初級の段階から談話教育に重点を置き、学生たちが積極的に活動する時間を多く設ける授業運営をした。秋学期開講の「朝鮮語2」でも同様に運営中で、春学期の内容に加えて3～4名のグループでドラマのワンシーンを作るといった活動もしている。

1.3. 授業の成果と今後の課題

最初は日本語の会話文を見ながら朝鮮語を話すことに対して少し時間がかかったが、授業回数を重ねる度に学生の反応がはやくなり、学生たちも実力がついていることを実感している様子であった。また、自分たちが朝鮮語でストーリーを作ることに對して最初は戸惑った学生が多かったが、現在は積極的に参加し楽しくペアまたはグループ活動をする様子を見せている。

このように学生が能動的に授業に参加し、教師である筆者は教室を回りながら、学生たちの学習をサポートする役割の授業ができるのは、やはり少人数の授業であるからであると思われる。もちろん徐々に学生の朝鮮語能力の差が広がっていき、指導に難しい場面も増えていくが、それぞれの学生に対してどのような指導が適切であるのかは今後の課題とし、引き続き学生が主体的に学ぶ授業を実践していきたい。

文責：李善姬

2. 必修科目の成果2：「朝鮮語A・B」の授業実践

新カリキュラムによりそれぞれの科目での授業目標が明確になり、学生・教員ともに①授業のイメージをつかみやすく、②目的意識をもって授業に臨むことができるようになったと思われる。本章では筆者が担当したインプットクラス(朝鮮語A・B)の授業実践を紹介することを通して、より効果的なインプット授業のあり方について考

察する。

2.1. 朝鮮語 A・B の授業における工夫

朝鮮語 A・B は 1 クラス 40 名程度の学習環境で、朝鮮語の文法的な知識と初歩的な語彙・語句の習得と、CEFR A1～A2 レベル程度のテキストを読解し聞き取れる能力、朝鮮語の理解力を総合的に養うことを目的としている。

授業が単調にならないように、①教科書以外の副教材を活用し、②教師による一方的な授業を極力避けペアワークなどの共同学習を導入して学生が主体的に学ぶことができるように工夫した。

2.1.1. さまざまな教材の活用

教科書以外にフラッシュカードや視聴覚教材を活用して、学生のインプットをサポートした。

①フラッシュカード

ブラウザで利用できるフラッシュカードを使用したところ、ハングルの発音練習に有効であった。教科書の単語を入力しておく、シャフルでき、飽きずに練習できる。作成にあたっては「フラッシュカード作成ツール」(<https://porocise.sakura.ne.jp/sekai/mkcards/>)を使用した。

②韓国の文化に関わる写真

写真や動画を見せて学習効果の向上を図った。例えば、数詞を学習する際に韓国の祝日や記念日の日にちを読ませ、併せて歴史や文化を紹介したところ、学生は興味を示した。秋学期では連体形の学習の際に韓国の駅の「나가는 곳 (出口)」「타는 곳 (乗り場)」といった案内看板を見せると反応がよかった。

③Power Point のアニメーション機能を活用

アニメーション機能を使用して設定時間内に教科書の例文を読ませると、盛り上がり楽しく練習できる。何回か読ませた後で制限時間を徐々に短くしていくと、「速い、速い」と言いながらも積極的に読もうとする学生が増えてくる。

2.1.2. ペアワーク

ほぼ毎回の授業でペアワークを導入した。具体的には、①教科書の応用練習をペアで読みながら意味を考える、②活用形を基本形に戻してどの語尾がついているかを分析する、③練習問題をペアで解く、といった活動である。

ペアワークの目的は、学習者を授業に参加させ、教え合う場を作ることにある。教師は教室を回り質問に答えていくので質問しやすい環境作りにも役立つ。教師の解説が長くなると、学生の集中力が落ちやすく質問しにくい雰囲気になってしまうが、ペアワークを取り入れることで学生同士の対話が生まれて理解度が深まり、かつ主体

的に学ぶ力を育てることができる。また、教室に活気が出る点でも非常に有意義である。

2.2. インプット授業の成果と改善点

インプット授業を担当して最も驚いたのは、学生たちのほとんどが短時間で目標通りの読解力を身につけたことである。本稿を執筆している11月中旬現在、秋学期の授業も半分が過ぎているが、既にハングル検定4級レベルの文をある程度理解している学生が多くいる。これは私が出講している他校に比べると2倍以上早く、インプットメインの授業の成果が現れたと思われる。

しかし、リスニング能力を上げることはできず、春学期に実施した聞き取りの共通テストの点数は作文テストの点数より10%ほど低く、学生からも難しかったという意見が多くあった。

この点を反省して、秋学期の習熟度テストにディクテーション問題を作ったが、ごく簡単な「누가예요? (誰ですか)」のような文も聞き取れない学生が過半数であった。結果として視覚情報中心の授業になっていたことを痛感している。

今後はリスニング能力を高める方法を模索して、多角的な観点からインプット技能の修得が図れるような授業を構成できるようにしていきたい。

文責：高権旭

3. 自由科目の成果1：ゲストスピーカーを活用した「上級朝鮮語リスニング・リーディング」

「上級朝鮮語リスニング・リーディング」は、中上級レベルの文法や語彙を学びながら、サブカル素材、ニュース、検定試験の問題などを教材として用い、読解力および聴解力の向上を目指す授業であり、授業履修にあたって、履修者は必修の基礎および中級レベルのクラスを修了していることを想定している。そのため、履修者の中心となるのは3～4年生である。2024年度春学期、新座キャンパスの「上級朝鮮語リスニング・リーディング1」には3年生13名、4年生5名の計18名の履修登録があった。

3.1. ゲストスピーカー制度活用の意図と授業の構成

このように3～4年生が中心となる授業であるため、大学で学んだ朝鮮語を就職活動や今後のキャリア形成にどう生かすかに高い関心をもつ学生が多い。そのため、毎年度「朝鮮語学習とキャリア形成」と題して、立教大学のゲストスピーカー招請制度を活用した授業を行っている。

招請制度は2019年度から活用しており、これまで同時通訳者、翻訳者、雑誌編集者、朝鮮語教材編集者など朝鮮語を使って活躍する人材を招請してきた。2024年度新座キャンパスの「上級朝鮮語リスニング・リーディング1」ではサブカル素材を授業教材の1つとして用いるため、本学の卒業生でありウェブトゥーン（デジタル漫画）の翻訳・編集に携わる平山茜氏を招き授業を行った。

なお、実施にあたってはより深い学びが得られるよう授業当日にゲストスピーカーの話の聞くだけでなく、事前学習や事後学習を行っている。2024年度は以下のような流れで事前学習・事後学習を行った。

- 第7回 ゲストスピーカーへの事前質問
- 第8回 ウェブトゥーン原文・訳文読み比べ（事前課題）
- 第9回 ゲスト講師授業「朝鮮語学習とキャリア形成」
- 第10回 ゲストスピーカーへの手紙（事後課題）

ゲスト講師登壇の前週となる第8回授業の課題は、ゲストスピーカーが翻訳・編集に携わったウェブトゥーンをそれぞれ原文（朝鮮語）および日本語訳で読み、翻訳について気付いた点や感想を書くという内容であった。また事後学習では毎年度ゲストスピーカーに対して朝鮮語で手紙を書く活動を行い、ゲストスピーカーに送付している。

3.2. 春学期授業の成果と今後の方向性

授業当日は以下のような流れで進行した。

1. ゲストスピーカー紹介（朝鮮語および日本語での自己紹介）
2. 翻訳の仕事について
3. ウェブトゥーン翻訳の面白さ・難しさ
4. 効果的な学習方法
5. 立教大学でどのように朝鮮語を学んだか
6. 留学生活について
7. 就職活動やキャリア形成に朝鮮語をどう生かしたか
8. 学生へのメッセージ
9. 質疑応答

「ウェブトゥーン翻訳の面白さ・難しさ」では、擬声語・擬態語について作品の一場面を用いて一緒に考える活動もあり、学生が出した意見に平山氏がフィードバックを行うなど有意義な時間となった。事前課題を行ったことが質疑応答での活発で質の高い質問につながった。「人名・地名のローカライゼーションについて」など多くの質問があがり、平山氏が実例や経験をもとに解説を行った。

学期末に独自に実施したアンケートでは、朝鮮語を使って活躍する平山氏の話聞くことで「学習へのモチベーションが高まった」「新たな視点が得られて有意義だった」などの感想があった。また、事前課題として指定された作品以外にも、事前・事後に自主的にほかの作品にも触れたという学生も多く、ゲストスピーカーによる授業が「主体的・対話的で深い学び」につながっていることが感じられた。今回はゲストスピーカー授業の後に学生が自主的に読んだ作品について共有する活動が十分にでき

なかったため、その反省を生かし、今後は事後活動をさらに充実させていきたい。

文責：齋藤盛午

4. 自由科目の成果2：映像翻訳のスキルを学ぶ 「上級朝鮮語演習」

日本国内において通訳・翻訳が学べる大学と大学院は、2024年刊行の『通訳翻訳ジャーナル』を参考に調べるとおよそ35校あるが、詳細をみると英語教育に集中していることがわかる。日本語と韓国語の通訳・翻訳が学べる大学は数少なく、あっても文学翻訳の授業というのが現状である。

そこで筆者は、日本メディアのニュースや情報番組に使われる韓国関連映像の韓国語で行われたインタビューなどを翻訳する「映像翻訳(メディア翻訳・放送翻訳)」という分野を新座で開講される「上級朝鮮語演習」に取り入れることにした。筆者は民放テレビ局で非常勤とフリーランスとしてニュース番組の韓国語通訳・翻訳を担当する仕事に携わった経歴がある。その経歴に基づいて受講生にリアルな現場の話やスキルを教えることが期待できるためである。

メディアで扱われている素材(映像)の翻訳には政治家や有名人の記者会見とインタビューもあれば、一般人のインタビューも多く、書籍などの一般翻訳と映像翻訳の一番の違いは「伝えたいことをいかにシンプルに簡略に(画面に内容が収まるように)訳すか」である。そのため、映像翻訳をするときに必要な「省略」のスキル修得のための練習を行い、かつ習得した類義語や関連用語の中から適切な語彙を選ぶ能力の育成に努めた。

4.1. 授業の概要

「上級朝鮮語演習1」は新座キャンパスで2024年度春学期の木曜日4時限に開講しており、立教大学において開講している上級科目の中でも一番上のレベルを想定している。履修者は10名(半年以上の長期留学者は2名、海外言語文化研修を含む短期留学経験者は3名)であり、半数が韓国の大学に留学した経験のある3~4年生であった。

授業では実際に日本国内で放送されたニュース動画(字幕削除バージョン)を視聴し、そのニュースに出る韓国語を翻訳した。翻訳する韓国語文は筆者が文字起こししたものを配布した。

4.2. 授業の流れ

各回の授業は概ね次の手順で進められた。

①筆者が編集した動画を授業中に視聴：

動画は日本のニュースやワイドショーで放送された韓国・北朝鮮関連の報道の中から、韓国語でのインタビュー部分を選定した。最近では日本語の吹き替えも多いので、最新ニュースの中で韓国人の音声が見える動画を探すのがまず大変

であった。選定した動画は字幕部分を削除した。

②筆者が文字起こしをした韓国語の原文(台詞)プリントを配布：

学期前半の授業では翻訳に集中させたいため、原文は筆者が文字化し資料として配付した。ある程度スキルが身についてきた後半の授業では、学生に韓国語の文字起こしから課した。

③受講生による翻訳：

同じ文章をどのように翻訳したか各自が発表した。翻訳にあたっては辞書やグーグルなど検索サイトを参考にさせた。辞書やインターネットを利用させる理由は、いくつかの類義語からより自然な語彙を選ぶスキルや自主的に調べられる能力を育てるためである。

発表された翻訳文に対して受講生同士で議論し、より自然な語彙を使用した訳を考える。この過程には翻訳家としてのセンスが現れる。平子義雄(2007)は原文と一対一の対応関係にある翻訳はなく、絶対的に正しい翻訳もないとしているが、この授業でも一貫して受講生にその点を強調している。翻訳に正解はないということを学生に教えることが大事である。

④まとめ：

関連専門用語や類義語、略語、若者言葉などを学習し、視聴した動画の内容を含めて日韓における最新ニュースについてディスカッションを行った。

授業で使用したニュース動画のソースは、NHK、テレビ朝日、TBS、テレビ東京、フジテレビのニュースとワイドショーである。例えば、以下のような話題を使用した。

- ①韓国の日本製品に対する不買運動
- ②韓国でヒットした日本アニメ「スラムダンク」を観覧した韓国人ファンのインタビュー
- ③韓国の少子化問題
- ④日本を訪れる韓国人観光客のインタビュー
- ⑤KPOPアイドルと所属事務所の対立

4.3. 授業の成果と今後の改善点

4.3.1. この授業で必要とされるスキル

この授業に参加するにあたり必要とされるスキルとして以下の4つを設定しているが、受講生10名のうち8名を対象にアンケートを実施した結果「直訳ではない読みやすい文章にできること」が一番必要なスキルだと答えた学生が5名で最も多かった。

①専門分野への深い知識があること：

普段からニュースや新聞を用いて時事問題を含む幅広い話題を把握することが大事であると実感した。

- ②意識をしても誤訳をしない能力があること
- ③直訳ではない読みやすい文章にできること：
映像翻訳の特徴として話し言葉が用いられるという点があり、直訳だと不自然になりがちであるという発見があった。
- ④調査能力があること：
グーグルなどの検索サイトを駆使しリサーチできる能力が重要であると知った。

上記④に関連して、김한식 (2003) は翻訳の際に、より自然な用語と表現を導くためにインターネットを活用することを推奨している。

4.3.2. 授業を通して習得できる能力

この授業を通して習得できる能力は何だかという質問に対する回答が以下の①～⑤である。最も多かったものは「語学力 (4名)」、ついで「日本語力 (3名)」であった。「日本語力」を選択した学生は、文章の意味や文脈を理解し、状況に合う単語を自分で選択する作業を通して、「自主的に考える」能力を身につけられたと肯定的に自己評価していた。

- ①日本語力：
文章の意味や文脈をキャッチする能力と状況に合う単語をいくつかの類義語から引き出す能力
- ②語学力：
一般的に使われる単語の正確な意味を知ることと専門用語を習得し活用できる能力
- ③知識力：
常に今話題になっているネタやニュースをチェックする能力
- ④調査能力：
初見の単語 (専門用語など) や話題について自分で調べて正しい情報を習得する能力
- ⑤流行語などの語彙：
最新ニュースの翻訳を通して若者言葉や流行語などを習得し活用できる能力

4.3.3. 今後の方向性

映像翻訳をする際に一番心がけている点は何かと聞いた結果「話し言葉から不要な部分を省略し、より伝わりやすく翻訳すること」であった。よって、これからも授業では「文脈を読み取って省略するスキル」を履修生に教えることが大事である。また、今後は字幕ソフトなどを使って実際の現場に近い環境を作るなどの取り組みが必要とされる。

文責：姜太銀

結論

言語B科目はそもそもの学習言語の特長の違いや難易度の差をふまえつつ、必修修了後の到達水準や科目名を統一するなど、低年次学生向けの必修科目という性質をふまえ、絶えずPDCAを回してきた。2024年度からの新カリキュラムの始動はその一つの成果である。朝鮮語教育研究室では、本稿で紹介したように受講生たちが学修目標を達成できるよう、授業ごとにさまざまな工夫がなされている。必修科目のように共通シラバスで、到達目標や授業コンセプトが共通のものであっても、李善姫先生や高権旭先生の論稿で見られたように、工夫の余地は多く存在している。こうしたアプローチに共通するのは、学生による主体的な学びの導出である。例えば、授業中のピア活動（協働学習）はもちろんであるし、齋藤盛午先生の論稿で見られたような学生のモチベーションを高めるという心理的な工夫も重要である。そうした積み重ねを経た結果が、姜太銀先生の論稿で見られた学生の主体的かつ肯定的な自己省察につながっていると考えられる。今後も学生の主体的な学びを促進しうる教育方法の検証を重ね、それらをより効果的かつ体系的に提供できるよう研究室全体で実践と考察を深めていきたい。

主要参考文献

- 羽田明浩 (2024) 「ゲスト・スピーカーの活用事例について」『大学教育研究フォーラム』第29号, 57-61.
- 平子義雄 (1999) 『翻訳の原理：異文化をどう訳すか』大修館書店.
- 김한식 (2003) 『한일 통역과 번역』한국문화사.
- 泉子, K, メイナード (2004) 『談話言語学－日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究－』くろしお出版.
- 小田隆治・杉原真晃編著 (2010) 『学生主体型授業の冒険』ナカニシヤ出版.
- 冲永隆子 (2023) 「ゲストスピーカー招聘講義にみるリベラルアーツ教育の意義」『帝京大学共通教育センター論集』第14号, 93-115.
- 島田和子 (2015) 「談話の能力の育成をめざした教育実践－初級スタート時から談話教育を考える－」『プロフィシェンシーを育てる3 談話とプロフィシェンシー その真の姿の探求と教育実践をめざして』, 鎌田修・島田和子・堤良一編著, 凡人社, 174-200.
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁 (2010) 『詳説 第二言語習得研究—理論から研究法まで』研究社.
- 『通訳翻訳ジャーナル 2024年 AUTUMN』 (2024) イカロス出版.